

第5回小樽市中小企業振興会議 【議事録】

日時：令和元年 11 月 21 日(木)13:54～16:00

会場：小樽市役所 別館3階第1委員会室

出席者：李会長、近久副会長、井上委員、上参郷委員、花和委員、伊澤委員、栗原委員、
齋藤委員、馬場委員、中田委員、加藤委員、小倉委員、石川委員、高橋委員

事務局：産業港湾部長、産業港湾部次長、産業港湾部産業振興課長、
産業港湾部産業振興課主査、産業港湾部産業振興課主事

次第1：開 会

事務局 <開会宣言>

本日は、御忙しいところ御出席いただきまして、誠にありがとうございます。
ただ今から第5回「小樽市中小企業振興会議」を開催させていただきます。
本日の会議につきましては、お手元の次第に従いまして、概ね2時間程度を予定しております。よろしくお願いいたします。
なお、会議は委員過半数の御出席をいただきまして、成立していることを御報告いたします。

次第2：事務局説明

会 長 次第の2「事務局説明」について、事務局の方からお願いいたします。

事務局 資料の説明に入る前に、中間答申について御説明をさせていただきたいと思います。前回の振興会議におきましては、今回第5回の振興会議で中間答申をまとめるということで、事前に案を送付をしますということにしておりましたが、前回の会議で、先進事例なども紹介して、支援センターのイメージ図などをお示しをしながら、センターの方向性についての様々な御意見をいただきました。そのために一旦整理をした方がよいのではないかと考えたところでございます。これからセンターの機能を考えていく上で、成功事例の実態などについて、視察になるか講演会になるかとかはまだ決めてはおりませんが、そういった実態を学んでいくということも必要ではないかなということを考えておりまして、中間答申につきましては、次回以降にさせていただきたいというふうに考えているところでございます。当初の予定が変更になりましたことにつきましては、お詫び申し上げます。

<資料1「第4回振興会議における委員からの意見概要」を説明>

会 長 ありがとうございます。ただ今の御説明について何か御質問等ございませんか。
なければ次の次第に移りたいと思います。事務局から説明をお願いします。

次第3：意見交換

事務局 それでは資料の説明に入らせていただきます。

<資料2「中小企業等の支援体制（案）」を説明>

<資料3「『取り組むべき視点』の整理」を説明>

会 長 ありがとうございました。ただいまの説明について意見交換をする前に、何か御質問、御意見等はございますか。

特にないようですので、さっそくですけれども意見交換を行いたいと思います。先ほど事務局から御説明がありました資料2になりますが、その下に今後の検討課題①として「センター機能等の検討」、さらには今後の検討課題②に「『取り組むべき視点』に対する取組の検討」がそれぞれ必要とされています。これらについて、どの点でもかまいませんので、御意見をいただきたいと思います。順番に委員の御意見を伺いたいと思います。

委 員 今の意見を聞いて非常に虚しく思いました。なぜかという、小樽の中小企業をなんとかしようとする会議で、小樽の中小企業の皆さんが望んでることが何かも分からないで、家を建てたいと言ったときに、行政側がある程度他都市の研究とか、色々なことを調べていただきました。そして恐らくこういう家がいいだろうとデザインから部屋の照明やカーテンまで決めてしまうと、こういう虚しさは非常に感じました。今までの会議、今日で5回目くらいになるんですが、1回目で確か、小樽市の中小企業の悉皆調査を行い、どういう課題を抱えているのか意見を聞こうという意見がありました。さらに2回目では、私は、小樽市で、資料で持っているデータでいいですから、リーサスによって小樽の経済状況どうなっているか調べてくださいという要望を出しておりますが、その答えもないまま、家のデザインを、そして建物を建ててしまうような会議は、僕は必要ないんじゃないかなと思いました。以上です。

会 長 かなりシビアな意見がありました。何か今の意見に対して事務局からございますか。

事務局 先ほどお話がありましたリーサスの件につきましては、研究をしている段階で、お示しをできるような分析には至っていないところでございます。またリーサスも全国的に公表されているものになりますので、これから、調査といいますか、分析については行っていきたいと思っております。

会 長 もう一点、中小企業への聞き取り調査が必要ではないかという意見もありますが。

事務局 実態を掴むための調査が必要ないとは思っておりません。会議を進めていく中で、必要な状況が出てきた段階において、調査については検討してまいります。

委 員 小樽の事業所の調査を全部小樽市の職員でやるというのはやはり困難が伴うと思います。それで、この会議には、各団体の代表が来ていますので、その方と手分けしてやったらどうでしょうか。市の職員の方も一緒に各団体の人と回ると、中小企業が抱えている切実な問題が身に沁みて分かるんじゃないかと考えております。

会 長 はい。特に今の御意見に対して御返答はし辛いと思いますので、その方向でどういう形が現実的に可能なのかというのを、もう一回検討していただける、ということでどうでしょうか。では次の御意見をお願いします。

委 員 パスしたいのですが、前回も前々回も申し上げましたとおり、私ども労働組合のナショナルセンターということで、労働者の立場で、ということで声がかかっているように思っております。課題のところで売上等のための支援についてなど4点、色々書かれていますと思いますが、何回も出席されている皆さんは経済の専門家というように私の方は認識をしておりますので、こういったことは書いておき、そのとおりに進むかどうかというのは分かりませんが、それによって当然のことながら事業承継がうまくいけば、働く場もできるし、そういったことを期待するものであって、これに関してああしたらい、こうしたらいい、という意見は、私どもの方では持ち合わせていないという状況ですので、御理解をお願いします。

会 長 意見として承りました。スキームをどういうふうにするか、という段階だと思いますので、具体的に労働問題とか、具体的に事業承継でどうのこうのとかなですね、論点が進めば、その時になったらもう一回、御意見を聞かせていただくというように承りました。次の御意見ををお願いします。

委 員 先の御意見を踏まえると、中小企業が何を求めているのかははっきりと把握されていないという中で、今回の出された案について意見を述べるのはかなり厳しいんですけども、恐らく今の意見は「取り組むべき視点」のところなのかなと思いますので、私の方では、資料2の今回の提案の中の、体制ですね、新しい中小企業支援センターの役割を、恐らく前回までの提案から今回絞りましたよという趣旨だと思うんですけども、売上げ増につながる取組に特化しようということなんですけども、おそらくそういうやり方はできないと思います。中小企業が抱えている課題の中に、やはり人口減少というのは消費の減少につながりますので、長い将来を考えていくと、中小企業が売上げを増やすというのはかなり厳しいと思います。ですから、現実的には売上げを増やすというか、収益率を高めるという方向性が一番なのかなと思いますし、それもただそういう企業が多いであろうということだけで、企業が個々抱えている課題は全然違ってきますので、こういう抱えている課題の中の一つを取り上げて、これだけをやりましょうというのは、現実的ではないかなと思います。

会 長 ありがとうございます。一番最初の案は、ワンストップとして日常の課題に対応する一番最初の窓口としての機能をセンターに委ねるということだったかと思います。それを様々な意見を伺いながら、全てをいっぺんにすることはなかなか難しいだろうということで、今回出されているように、できるだけ絞った形で、最初は小さく出発して、段々成果を見ながら大きく発展させましょうということだったと思うんですけども、見方によっては今おっしゃったとおり、これは果たして可能なのかということを考えると、みんなやっぱりつながっている課題だと思いますし、売上を増大させるというのは、これができたら苦労もいらないわけで、現実的に対応するにはどうしたらいいのかという話に議論が戻っているような印象はぬぐえないのかなと思います。さっき委員からもお話があったとおり、最初総論賛成で始まって、具体的に誰がどういうように進めるのかという話になったときに、こういう提案になったのが、少し後ろ向きに見えるところもあるかなと思います。この点について事務局から何かありますか。

事務局 機能を絞った方がいいのではないかということは前回の意見を踏まえてなのですがけれども、売上げ増を中心に取り組むということについては、先ほど説明しましたけれども、ビズというのがあって、これは今、全国で20箇所くらいあると思いますが、これは企業の長所を伸ばして売上げ増につなげている成功事例として話題になっているところですので、まずはその成功事例に基づいて、当然小樽が同じ形でいいかどうかという議論は必要なのかと思いますけれども、そういった成功事例を取り入れた中で、次の問題というのに関連してくるわけですが、そこについて今日考えていたのは、まず意見をもらって、その意見の中で今度仕組みを考えていく、その中でまずは立ち上げをする売上げ増に特化したセンターに附随をしていく、あくまで実績が出た段階でそういったものをくっつけていくといったことを考えておりますので、御理解いただければと思います。

会 長 次の御意見ををお願いします。

委 員 私は金融機関という立場でもあるんですが、今は商工会議所を中心に創業支援とかやっていますよね。今、実際にそういうことをやっている中でセンターを作るのはどうなんだろう、という話を前にしてたと思うんですが、今回の「取り組むべき視点」というのは色々産学官の中で、皆さん色々個別にはやってるんですよね。これをどうまとめるのかというのがいま見えなくて、中小企業支援センターで全てをやるわけじゃないので、要は、一手間、支援センターで増えるのかなと。私のイメージだと、中小企業支援センターでまず何でも受けましょうと。もし仮に創業支援の相談が来たときに、ここで受けてそこで話を聞いて、商工会議所に行って話をし、それから金融機関に行くのかなと。今は商工会議所で話を聞いて、それから金融機関ですから、一手間増えるというようなイメージがあるので、そこはこの仕組みとしてどうなのかなと思います。

会 長 ありがとうございます。今の意見について何かありますか。

事務局 確かに今、創業支援は商工会議所を中心に金融機関の協力を得ながら対応しているというのが実態で、今の指摘については確かに、現状の形からいけばそういった手間が増える形になるのかなと思いますけれども、このセンター全体のことをこれから議論していく中で、効率の良い仕組みを考えていかなければならないと考えているところですので、参考にさせていただきたいと思ってます。

会 長 そうですね、ここに協力・連携と書いてますけれども、既存の仕組みは既に存在しているというのはそのとおりなんですけれども、ただどこまで機能しているのか、どこまでそれが小樽の実状に合っているのかとか、様々な課題は個々にやりながら感じていることだと思います。その辺が少しでも改善されるような協力・連携を組めるとすればセンターの意味は少しはあるのかなと。その議論がほとんど今されていないので、色々な誤解とかが生じている気がします。次の御意見ををお願いします。

委 員 本日私が話したかったことが半分以上話に上がっていたのですけれども、前回、そして前々回のこの会議で、総合支援センターの事業案について、基本的には賛成の立場で発言をさせていただきました。また更に、小樽市内における中小企業者の実態調査もぜひやって欲しいと、他の市も状況も交えてお話をさせていただきました。その後、正直悩みまして、小樽市として、市としてこれまで取り組んだことがないこういった施策を思い切ってやることで、突破口が見出せるのではないかという従前の考えと、地域の業者の実態も掴まないで、本当に今の小樽経済に必要なものが何かも出さずに、器だけ用意して、拙速に進めようとしてはいないだろうか、そんな考えも芽生えました。そこで、第3回の振興会議における意見概要から、賛成・反対両者の意見を改めて読み直しまして、考えました。他の都市で成功している事業に倣って小樽でも、とも思うんですが、それは必ずしもこの小樽に当てはまる事業になりうるのか、いささか心配を覚えます。この振興条例の条文を作る際に、他都市のそれを引用するのはかまわないと思います。理念条例だからです。ただ、具体的な施策まで真似ればいいというものではないと思うのです。2017年8月、中小企業振興基本条例の制定に向けた検討委員会の初会合に北海学園大学の大貝健二准教授の講演をいただきました。大貝先生はその時、長期に及ぶ経済的低迷が地域を衰退させている現状と、危機感から各自治体で条例の制定が進んだけれども、絵に描いた餅、できちゃった条例、条例を作った後に何をしたら良いかわからないという自治体が増えているということも触れながら、条例制定に取り組んだ自治体の実例を挙げてお話をくださいました。講演を聴いた後で、条例をただ作ればそれでいいんじゃないんだ、条例はあくまで器でしかないのか、条例を生かすも殺すも条例制定以後にかかっているんじゃないか等々、戸惑ったのを覚えています。この条例を活用して、どういうまちを作るのか、観光客のためばかりではなく、生活する地域住民のためにもなるものは何か、議論を深める必要があると思います。総合支援センターの事業案を具体化させる前に、市内経済の実状を正確につかむための調査を市内業者に対して行って、本当に必要な支援事業案を策定する、地域活性化のイメージをこの席上で共有することが先決ではないかと考えています。

会 長 ありがとうございます。別の委員も同じことを言っていたと思うんですけれども、箱を作る前にすることがあるだろうと。しかも他の地域の先進事例と言っても、小樽とは状況は違うので、小樽にふさわしいそういった中小企業が本当に息を吹き返すような実現可能な施策につながる、そういったことを時間かけてでも作りましょうという意見だったと思います。貴重な意見ありがとうございました。次の御意見をお願いします。

委 員 私はですね、この会議って今小樽の中小企業が何が必要なのか、何が足りないのか、何を支援すればいいのか、そういうことを議論していく会議だと思ってるんですけれども、もちろん今の小樽に足りないものを、企業に足りないものを支援していくための会議をするのもすごく良いことだと思うんですけれども、今の小樽市の現状って、人口減少する一方で、超少子高齢化になっています。前回・前々回に発言したと思うんですけれども、やっぱり高校生とか大学生もそうですし、子供たちをどう小樽に残していくか、子供たちに小樽の企業にどれだけ入っていただくか、それが本当にすごく重要なことだと思っています。そういうところを、なるべく支援できるような体制を作っていけたらいいなと思っています。今月の初め頃にウィングベイ小樽の4階で、小樽ワークステーシ

ヨンが、小樽の中小企業を集めて、子供たちの職業体験プログラムを開催しました。スタッフだけで 250 名規模のイベントです。子供たちが入場するときにずらっと並んで、整理しないと入れないくらい来てくれたそうです。うちの会社はそこではなく、その前にやった企業訪問見学会体験プログラムに参加させていただいたのですが、ウィングベイ小樽の方は行ってないので状況は分かりませんが、そういうことをですね、小樽ワークステーションという団体がやってます。そして、この団体は、誰がやっているのというと、主婦がやっているんです。小樽市に住む主婦、5〜6 名くらいが主体になって、商工会議所などのメンバーに協力を頼んで、企業を集めてやってるんですよね。それをもう 15 回くらいやっています。こういう取組をもっと知ってもらって、協力できるようなところ、団体をちゃんと作ってやっていけたらいいなと、すごく思ってるんですよ。小樽の企業についても、栄養のない木に花を咲かせようとしても花は咲かないんですよね。肥料をまいて、種をまいて、時間をかけて花を増やしたり、咲かせたりしないといけないので、そういう肥料をまいたり種まきをするような活動をやっぱりしていかないと、今後 10 年、20 年経った小樽にどんなことが起こるのかなって、本当にそう感じています。ですので、その辺をもっとこう、議論できるような、もっとこう支援できるような、そういうようなところをやっていけたらいいのかなと思っています。

会 長 貴重な御意見ありがとうございます。今のその現状の分析だけで議論を進めても、将来あるべき小樽市の未来像、ビジョンみたいなものを見据えて、特に子供たちがもっと良い環境で働ける、こういった場作りも今の時点で取り組むべきだと、こういった話でした。次の御意見をお願いいたします。

委 員 私は箱を作ること自体、当初から反対をしまして、箱を作るよりも、売上げよりも何よりも、やっぱり人口減をどこまで食い止めるかを考えないといけないなと。モノを作りたくても人がいない、注文が来ても人がいないから作れない、AI 化だとか何とか言いますけれども、工業組合、錢函の場合は工場が多いですから、ましてや小樽はものづくりのまちです。手作業じゃなきゃとか、人じゃなきゃできない仕事がいっぱいあるってことを、まず小樽の産業を考えると、考えていただきたいなと思います。今回の色々な提案の中でも、一昨日ですか、「高齢者との働き方」というテーマで講演会がありました。私は出なかったんですが、うちの会社の者が出て、非常に高齢者と共生してというか、短時間労働だとか、働き方改革とかもあるし、高齢化をマイナスだけに考えるのではなく、色々な形で例えばマッスルスーツという、着るだけで 20 キロの重さが 5 キロくらいの軽さで扱えるとか、色々そういうことを、どんどん高齢化が進んでる小樽であれば、ものづくりのまちでもあるし、紹介していただければなと思います。それと、これは余談かもしれませんが 4 年前と比べると、手稲区の人口は 14 万人で現状維持しているのに小樽は 8 千人減の 11 万人です。こんなに目と鼻の先なのに、これだけ差がつくということをもっともっと中小企業センターよりも先に、もっと人が住みやすいまちづくりを考えていただければ、売上げ増なり、人口増なりにつながるのではないかと、いうふうに思っております。

会 長 ありがとうございます。貴重な御意見でした。視点が変わってきてるのかなという部分はあるんですけども、ただ小樽にとっては一番取り組むべき施策の最上位だと思います。

ます。人口減を食い止めるのはなかなか難しいと思いますけれども、人口が減っていく中でも、例えば先ほどのマッスルスーツのような産業や IoT や AI といった色々な技術を加味しつつ、小樽市ならではだったり、小樽でできるようなものづくりを更に発展させられるのかという話は、一番基本の考え方に据えないといけないのかなと改めて思いました。次の御意見をお願いいたします。

委 員 小樽の人口減の話が出たり、小樽の企業のことだとか、色々な意見を聞いてそうなんだよねという部分がありながら、すごく発言が難しいなと思いつつなのですが、今回の振興会議の中で小樽市が関わり、我々ができることって結構レンジは狭いと思うんですよ。実際小樽を本格的に再生しようと思ったときには、確かに経済の問題もあるんですが、根本的にあるのは先ほど各委員がおっしゃられたように、人口減が最大のネックになっていますよね。実際この札幌圏の中で小樽では、なぜ減なのか。前に言いましたよね、固定資産税の問題ですとか、家賃の問題ですとか。色々な問題にどう対応するかという意見が小樽市から挙がってきていません。ですから、やりようがないと諦めている部分が根底にあるんじゃないのか。僕は 2、3 回やっているうちに何か反応があるのかなというようにやってるんですけど、まるっきり返ってきませんよね。そこには手をつけないで、そこそこをお願いしますよという意見をお願いされているのだとすれば、基本的に小樽の人口は下がっていくんだなと考えています。小樽の企業で基礎的な部分の労働者を外国人実習生が担うケースは絶対的に増えるわけです。小樽市内の高校生や卒業生がカバーしない、社会に出てくる人がカバーしない。どういうことかということ、3Kは対象外になってますよね。そうすると、じゃあどうやってここに活かすかといったときに、もうある分無理なんじゃないのという部分があるんですよ。ものづくりのかなりの部分で。だとすると、第3次産業、もしくはITという先進的なところには人は集まるけれども、第2次産業ですとか、きつい作業のところには日本人は集まらない傾向が実態としてあるんですね。これ皆さん分かっていると思うんです。もう状況で分かっていますし、世界的にそういう傾向があって、今までは、都市間競争だけで済んでいるが、国際的に競争になっている、人を集めるのが。それに今の小樽の環境で勝てるのという感じですよ。もう遅いんじゃないのという部分があるので、実は非常に不安に感じています。じゃあどうするか、このまま果たして死ぬのかという形になってくるわけですが、結局はですね、都市間競争で勝たないことにはどうしようもないと。少なくとも敵は北広島であり、石狩であり、千歳であり、というところと、どう対抗して人を持ってくるかというようなシビアな戦いなんです。それを持ってきて、基本的な人口を増やさないことには、何をやってもダメなんじゃないの。その一番ネックになっているのは、私は前にも言いましたが家賃です。若い人が住める都市じゃないです。そこをどうやってカバーするかといったときに、私前回言いましたよね、どうやってそれに対して小樽は対応するんですかって。どうしたらいいんですかねって提案をしました。全然返ってきませんよね。それは固定資産税を下げると税収が下がりますから何もできなくなりますよね。私たちの給料も関係ありませんかという形になってくるからですよ。シビアな話。皆さん関わってきますから。だからそこらへんを真面目にやりきることと、できないことをきっちりやらなきゃいけない時代になっているんだと思います。じゃないとどんどん落ちるだけです。間違ひなく負けます。今のままでしたら。どうやってね、今残っているのコンビニだけじゃないですか。増えてるのは。市場の売上げもど

んどん下がってますよ。人が入って来ないですから。今はですね、まだ戦える部門がありますけれども、そのうちになくなりますよね。本当はかなり瀬戸際ですからね。ですから、こういう意見もあるんですけども、じゃあこの会議で何をするのというときに、真剣に残すべき、戦って勝てる企業って何なのというのをちゃんと絞って、そこに集中投資するのか。どうやって人を集めるかという段階に移さないといけないのだろうなと思います。ただこれすごくシビアなので言いたくないんですけど、でも実際皆さん一番感じてると思います。

会 長 ありがとうございます。次の御意見をお願いいたします。

委 員 皆さんが言っていることを全く否定するわけではないし、そのとおりだと思ってるんですけども、人口問題が究極の問題だと認識を持っております。実はですね、この会議というのは中小企業振興基本条例を作って、中小企業がこの非常に苦しい中で、どう活性化し、ある程度成果を残しつつ、人口減少をどう止めていくかというのを話し合っただけで、どうしていこうかというものだと思うんです。私の立場から申し上げれば、ずっと言っているように、時系列的に見たときに、昭和の時代、いわゆる高度経済成長時代があり、バブルが弾けて、平成の時代に移り、そして令和の時代に入ったと。こういった、時代を超えた時系列の中でね、経済構造とか流通構造とか、当然グローバル化もあるし、それから IT、色々な状況の中で社会が変化している中で、特にバブルが弾けたときが一つのターニングポイントで、価値観が変わり、そして色々な自然淘汰されてくる状況が平成の時代にあったと。そういう状況を踏まえたときに、従来のビジネスモデルでやってきたものが、対応できなくなっているというところに、実際に中小企業は小樽を取り巻く環境の中でもなかなか追いついていけない。それが非常に関係してきているのが、この 10 数年の間に、統計的にも卸・小売が 4 割以上、5 割近くが事業所がなくなり、従事している従業員数も減ってきているというような状況を踏まえて、じゃあどうするんですかというところが一つのポイントになってて、私も仕事している中で、主力の取引先が百貨店で、その百貨店も御存知のとおり、もう 3 割くらいはなくなっている。毎年 10 店舗ずつ未だに減っていると。最終的に 100～150 の間で止まっちゃうんじゃないかと。半分になると、そういう状況の中で販路がない、当然我々経済活動をしているので、モノを作ってモノを売るという需要と供給の関係の中で、人口が減ること自体が問題であって、じゃあそれを国内の中で、立地産業の中でどういうふうにその中に入り込んでいくのかという新しい販路の開拓と、もうひとつは海外、貿易を通じてモノを売っていくかと。こういう視点を大局的に考えながらやっぱり進めていくことだと思います。今回のセンターの部分についても否定はしません。当然必要なんですこれ。要は、今の時代に対応していく部分の中で、拡大していくよりも、今の状況を維持していくことすら非常に難しくなっている。特に製造業の方は。もう卸と小売というのはこれからある程度やっていくというのは難しいと思ってるんです。根本になる製造業自体が、非常に危機に瀕しつつある。売り先がなくなっている。これをどうするかという部分の中で、やはりこういった個々の企業は当然のことながら、業種によって、課題も、問題も全然違うんですよね。だから十把一絡げにはできないんです。私が中心にやっているのは食品製造業、または卸・小売を含めたそちらの方を中心にやっていると。個々の、それでも同じ食品業界でも全然違うんですよね、課題が。だから個々にフォロ

ーしていくという体制はやはり必要なんです。けども、それだけでは追いつかないと、前回は申し上げたとおり。それは所詮問題の解決にはならず、新しい付加価値やビジネスモデルを作って、そこを起爆剤にしながら拡大していくということをやらないと。だから、今回鳥取の例を出していただいているんですが、これがどういう中身でやってるか分かりませんが、自分たちで作ったものを自分たちで売るというのはアパレル業界の中でユニクロが成功したような形の中で、それをやっぱり色々な形で地域版であったり、それから他の業態の部分の中にやっぱり取込んでいくような考え方がね、6次産業化ももちろんそうなんですけれども、そういったSPA（製造小売）的な発想を持ちながら、新しいビジネスモデルを作っていくということもやっていかなきゃいけないんじゃないかということです。小樽・しりべしを中心にして作られたものを、どう今機能が低下していないものを、どう卸して、どう小売をしていくかということを含めて、総合的な新しいビジネスモデルを作っていくことを考えていかなければいけないのではないかと。そういう意味において、例えば、この支援体制案の中で、こういった細かい部分でやりながら、各地域の全国的なペースでビジネスモデルを研究する。この前提案ありましたけれども、北海道でやっている20何名の優秀なプロフェッショナルな皆さんが対応しながらやっています。これ実は我々も来年度に向かって、具体的にこの辺の所と関わりを持ってやっていくという方に、会員さんも含めて一緒にこういったことを連携しながらやっていく予定で今組立を行政の方とも話し合いながらやろうとしているんですよ。もちろんこれをもっと広くやるということも大事なので、ただもうひとつ言いたいのはどうしてもですね、もっともっとダイナミックに大きく新しいビジネスモデルやサクセスストーリーを作らないと。それを広げていく形、もっと単純に言えば我々の団体の本来やらなきゃいけない貿易、海外への産品をある程度やっていかなきゃいけない。そこには当然、言葉の問題ですとか、それから通関を含めて専門家も必要ですし、そういう専門家が入れば、その人たちにビジネスモデルを提案していただく又はもう会社を作る、そういう形ですぐ価値を生み出すことも同時にやっていくことも考えていかないとダメなのかなというように思います。今の業務を通して今の課題と、それから新しいことへのチャレンジをこの中小企業の活性化の中に盛り込んでいけるように考えていただければいいんじゃないかなと思っています。

会 長 ありがとうございます。私からのコメントもないですけれども、先ほどおっしゃったとおり、北海道、というか小樽は人口が減少しており、超高齢化ということが最大の問題となっておりますが、確かに海外を見ると、人口が増えている国は周りにたくさんあって、ベトナムもそうですが、そういったところをどういうふうに市場として考えていくのかというのも一つの活路の見出し方かなと思いますし、あるいはそこから若い人たちに小樽の魅力をアピールして来てもらう、こういった視点も場合によっては必要なかなと思いました。続いて御意見をお願いいたします。

委 員 今まで皆さんの意見を聞いて、ただそのとおりだなというだけで納得するしか、意見がまとまってないんですけれども、まず皆さんからお話があった、少子高齢化が小樽がすごく進んでいる、そしてまた若い卒業生が小樽に就職をしないで出ていってしまうということを皆さん言われて、そのとおりだと思います。しかし、中小企業支援センター、これをもしも作るとしたらですが、小樽市内の中小企業がやはり魅力ある職場になれば、

若者も定着すると思います。それが出ていってしまうものですから、人口問題ですね、卵が先か鶏が先かというお話になると思うんですけども、やはり一番の問題は人口問題だと思います。しかし、そういうことで、市内の大半の中小企業がやはり魅力ある企業に育っていかなければならないと思っております。それで私前回もちょっとお話ししたと思うんですが、具体的に資料3で小樽商科大学さんでは色々な研究をしていますよと、それから能開大さんではこういう受託研究をしていますよ、そういうことが色々具合的に出てまいりました。そこで私は出席できなかったんですけども、小樽地域雇用創造協議会の主催で、後援としては商工会議所さんとか、色々な団体でそういうセミナーがあったみたいなんですけれども、前回は言ったとおり、各団体がですね、横の連絡がまだ密に取れていない、同じようなことのセミナーを何回も主催者が変わって、そして講演者が同じなんですよね。例えば商工会議所さんが起業の支援のセミナーをすると、後援が小樽市だとか、それから色々な団体の後援がついていると。何か同じようなことをあちらこちらでやってですね、何かとりとめのめないようなことをしているなど。もう少し横に連携を取ってまとまれば、じゃあ管轄はおたくはここだよ、商工会議所はこっちだよと、小樽市はこっちだよということがまとまれば、もう少しこの支援センターの先が見えてくるような気がするんですけども、ちょっと私の勉強不足でしょうか。私は率直にそう思いましたんで、言わせていただきました。

会 長 ありがとうございます。私からかなり言いづらいんですけども、おっしゃられていたことを私なりに解説すると、多分小樽市だって縦割りと言われてますけども、小樽市内の色々な団体のまた縦割りが更にあって、横串がなかなか通せないという現状というのが、こういった必要性につながった、という意見のように思いました。続いて御意見を願います。

委 員 第4回振興会議が終わった後に、会員が集まってですね、討議をしました。そのときに皆さんに言われたのは、お前何やってんだと。支援センターとか、なんじゃこらと。なぜかという、この支援センターは今の団体と同じだなと。もし仮にやるとすると、こんなにたくさんやれるわけないんだから、これでやるとしたら必ず販路拡大になるだろうと。それで、販路拡大でやって、例えばそのAという会社が、売上げが110%、120%伸びたとしよう。でも小樽の事業所の中で半分以上は赤字だという状況の中で、単に赤字が埋まっただけで、単純に雇用というのは生まれてないよな、生まれないよと。これでは多分うまくいかないよということで、ガツンと皆さんと討議をさせていただいて、改めて人口の状況を見ますと、全道で7位を誇る小樽市ですけど、先ほど見ましたら、生産人口構成比は26位、年少人口構成比は28位。つまりこれに向かってどんどん下がっていくということですよ。そういった意味で本当に人口減というのは、大変なことになるなということではあるのですが、ただこの振興会議でこれを討議しても、結論は多分出ないのだろうと。目的がそこだけでは、ターゲットがあまりにも多すぎて、その辺の部分がちょっと違うかなと思いますけれども、ただ生産人口を増やさなければ、子供のことも含めてですね、増えていかないということを鑑みますと、やはり若い人の人口をどうやって増やしていくのかと。魅力のある会社や状況をどうやって小樽は作りだしていくのかということを、もちろんセンターというのも大事だと思うんですけども、一般的にいうセンターというのは多分必要なのかなというのはあるんだと思います。

ワンストップで何でもできて、何でも相談できる場所というのは絶対必要だというふうに思いますが、それよりも振興会議は、そのセンターを作るために会議をやっているのではなくて、中小企業がどう良くなって、そして小樽市民の皆さんが幸せになるというためにやるべき会議ということだと思ふので、センターをどうするこうするというのは、置いていてということではありませんけれども、きちんと整理をしながらも、その議論は、ワーキンググループとか、そういうところでやるべきであって、ここでは、どうやったら中小企業が振興してくのか、発展してくのかということをやっていかなければならないと思います。その中で、やはり若い人を増やすためには、創業、魅力的な会社を作るか、そして魅力的な会社になるかということなんだろうと思いますので、起業とかを後押しする部分を確実にやってなければ、せっかくこれだけの交流人口のある小樽でですね、もったいないなと思うところかなと思いますし、もちろん観光の産業の部分についてもですね、それに附随してくるものづくりも含めて、やっぱり上手い仕組みを作っていないと、このままでは本当に先ほども皆さんが言われたとおり、人手不足になって、いわゆる黒字倒産というのがあるんですけれど、そのような状況になってしまっているのではないのでしょうか。せっかく需要はあるのに、きちんと答えきれていないところが今の厳しいところなのかなと思っているところですが、とにもかくにも、振興会議の原点に少し戻ってもらって、振興会議がやるべきところを、今一度何をすべきなのかを皆さんで討議した方が良いのではないのかと思います。

会 長 ありがとうございます。色々な視点で示唆をしていただきました。続いて御意見をお願いいたします。

委 員 困りました。今日の検討の意義は、資料2と資料3で、資料2の取り組むべき視点を資料3で詳しく整理して下さったというところから、中小企業振興会議なので、組み立てざるを得ません。先ほど皆さんが御発表なさっているときに、何度も行ったりきたり読み返しますと、この5つに整理された「取り組むべき視点」の中で、程度は別として、できていることとあまりできていないなと思うことは、こういう整理をしていただくと、ありました。それと、これはやっぱり力を入れてやっていかなきゃいけないなというのと、これはまあそこそこやれてるから、新しくやる必要はないかなということがありました。そういう視点で整理をすると、2番3番4番はそれなりに色々なことをやっているのかなと。1番と5番はちょっと弱いかと。やってないとは言わないですけど。やっぱりもう少し話を進めるべきかなというふうに見えております。散々危機感の話が出てますし、それは市民やここにお集まりの委員の皆さんも市役所の方々も一緒だと思いますけれども、人口が減って行って、僕はこの世に多分いないだろうと思われる2045年、6万人になるよと小樽市が言われている中で、小樽市はどういうふうに生き残るかというのと、どういう動きをするのか、中小企業を振興すれば全て生き残れるわけではないですけど、よその3万人のまちが6万人になると、20万いた人口が12万人に50数年かけて減って、あと25年でまた半分になると。だから、6万人になるのを7万人にしようとするのは、札幌の人口をなんとか引き寄せるといことはしてもいいと思うけども、石狩や恵庭や北広島や岩見沢は、まあ千歳は別ですけど、そういうところから人をこちらに来てもらうという考え方は、やめた方がいいんじゃないかなと思います。だから、そういうふう色々なものの見方をしていって、ターゲットを絞ってやっ

ていくということを、かなり市役所の皆さんがリーダーシップを取ってやっていただけるのがいいかなと。僕はそれをこう進むとなれば、全然どうでもいい話も、すごく尖った話も、どちらもお手伝いをしたいと思っています。中小企業振興会議なので、この「取り組むべき視点」のところをもっと掘り下げて、どうしてもこう、センターの枠組みに話がクローズアップされてしまったので、どうもそれは食えず嫌いに皆さんなってしまうというところがあって。大事なの中身でして、もったこう、ここはこうだよとか、実は形はあるんだけど大した利用されてないよねとか、そういう話を振興会議はもっとすべきかなというふうに思いましたので意見を言わせていただきました。

会 長 最後なので、本来の議論すべきところに一番的を射た御意見だったのかなと。司会として失格だったなと反省していたんですけれども。確かに取組として5つ挙げてますけれども、この中で優先的に取り組むべき事項として、何が必要なのかという検討、委員が指摘されたとおりだと思いますけれども、一番目の産学官金連携による共同研究では、さっき委員もおっしゃったとおり、新たなビジネス展開、ビジネスモデルを新たに、新規ビジネスを起こすよりは、新たな事業に対応するような改革をしていくと、こういったことが必要になると思います。そうやって考えると、ここに小樽商科大学と共同研究とか下に書いてありますけれども、実は大学の中でもビジネス相談とか、あるいはビジネスコンサルの制度っていうのをちゃんと設けてまして、その窓口の役割を実は私やってるんですけれども、なかなか小樽市の企業からは問合せがほとんどなく、札幌とか、他の地域からの問合せが結構あつたりしますのでそういうところも、知らせていないというのものもあるかもしれないですけれども、もっとお互いに連携しながら活用するというのもやっぱりもっとしていかなくちゃいけないと。当然金融機関もかなり色々なことをやってるのも知ってますけど、そこもなかなか実際やろうとしてもなんかこう、ハードルが高そうに見えちゃってるみたいなんですよね。大学とか金融機関となると、実際行っても相手にしてもらえないといった先入観があると思いますので、そういった意味では、本当にガッチリとタッグを組みながら、こういったセンターを作るかどうかは別として、これが機能できる仕組みは考えていくというのは必要かなと、今、委員の話を聞いて思いました。あと、最後の観光消費の積極的な地域内の循環、これもおっしゃったとおりですね。これだけ800万人が毎年来ている、これだけ地域ブランドとして有名になった地域というのは小樽以外ないのかなと思うんですけれども、これを有効に活用していない、小樽の経済人、私も含めてなんですけれども、外から見ると、本当に何やってるのという話になるかと思うので、そこをちゃんと地域の中である程度経済効果をしっかりできるような取組が、今までも皆さんやってきたと思うんですけれども、やっぱり足りなかったんで、こういうことになっているということもあるので、そこをしっかり真剣に、この振興会議の議論の上にのせて、市も経済団体もみんな巻き込んでこういった取組をしていければと思います。前もそういう議論だったかと思いますが、18時になったらみんな店仕舞をする観光地って、多分どこ探してもないと思いますし、鶏が先か卵が先かという議論になりますけれども、やっぱり1時間でも店を、例えば18時までが19時に仕舞うような取組をみんなで行ったら、全部は賛成できないかもしれないですけれども、1つ2つ、3つと賛成する企業が出てきたら、恐らく小樽の観光地は変わっていくのかなという気がしますので、色々な対策を、少しでも前に進むべき次回の議論につなげればさらに嬉しいなと思いました。最後にまとめの意見として、

よろしくお願いします。

委 員 どのようにまとめようかなと色々考えましてですね、この議論を聞いてなんとなく自分
が分かったなという気がするのはですね、この委員会で何を議論しようとしてるのか不
明確なんじゃないのかと。その1つはですね、この「取り組むべき視点」に書かれてい
るように、人口減少を含めたこの取り組むべき視点の対応法を議論しようと考えている、
ディスカッションしてるんですかと、そういう理解の人も多いんじゃないかなと。私も
その一人でした。そういう理解もあろうし、あるいは今回出てきたように個別企業ある
いは商店の売上げ増のための方策を議論しているんだというような考え方も一方で出て
くるわけです。そのどちらを議論してるんですかという、ちょっと曖昧なまま議論がさ
れてたのかなという気がするんです。そのどちらを議論してるにしてもですね、次に問
題なのは箱物を作るのが有効なんですかという疑問が今度出てくるわけなんです。箱
物を作ったってあんまり意味ないんじゃないの、当然そういう疑問が出てくるわけです。
で、まず最初の人口減少を含めたこの「取り組むべき視点」という行政的なことをしっ
かり議論するというんですかね、そういうことに回答を与えるようなセンターを作るん
だとすれば、まずセンターを作る前に委員会とか、あるいはワークグループなのか分か
りませんけれども、そういうところでしっかり議論すべきじゃないんですかと。それがこ
の委員会だったんじゃないんですかというふうに考え始めるわけですね。その疑問を先
ほど委員もお話になったのではないかなと思うんですよ。私もここでもっとそういうこと
を議論すべきじゃないのというふうに感じたりするわけですね。いや、個別企業のある
いは商店の売上げ増をするための方策を議論しているんだとすると、箱物を作った場合
に、本当に機能するんですかと。センター、商工会議所、金融機関と3つのところで、
今まで2つであったところが3つになるだけじゃないですかという委員の疑問が出てく
るわけですね。そういう意味で、本当に箱物がいいんですかという疑問が当然出てくる
わけです。今回提案されているように、売上げ増の箱物を作る、その成功例としてビズ
というものが成功事例としてあるんだとすればですね、小樽の既存組織の機能と対比し
て、何が不足しているからビズのようなものを期待するんですかと、やっぱり分析すべ
きだと。ここにちゃんと書かれているんですね。今回のこの資料の中に。上の方の白地
の所で下から2つ目、今までどのような支援が不足して、このセンターができることで
その支援が機能するようになるのか整理していく必要がある、ここでちゃんと書かれて
いるんですね。そういうことをやっぱり分析する必要があるだろうと思います。ですから、
まとめとしてはこの委員会はどちらをより議論しようとしている委員会なんですかと、
ちょっと明確にした方がいいなというのが一つです。もうひとつ別の話で、人口が減
ってるねということで、すごく問題視された意見が多いんですけどね、それって本当なん
だろうかと僕思うんです。というのはですね、これからこのまちでも人口は減ってい
くんですよ。で、人口が減るということは、食わしていかないといけない人の数も減る
んですよ。ですから、今までと同じような総収益と言うのか、総利益を上げる必要はな
いと。委員が言われたように、利益率をどう上げるかというようなことを考える必要が
あるんじゃないかと。それは人口減だから上がらないんだということではないだろうと
思うんですよ。もうひとつ、やはり住みやすいまちづくり、魅力的なまちづくりをど
うすればできるのかと。それは人口が減っていくまちにおいても僕はできるんじゃない
かなと思いますね。ですから人口が減っていくからもうダメなんだと考えるのはいかが

なものかなと思ってたりします。

会 長 ありがとうございます。一番最初の、どちらを主に議論するのかということを意見いただきました。そこらへん、今事務局の方から何かありますか。

事務局 元々この中小企業の会議の考え方として、皆さま方から御意見をいただきまして、それをまとめたものがこの資料の右側の方に記載しております、「取り組むべき視点」でございます。皆様方からこのような御意見を頂戴いたしまして、なかなかその課題が幅広だったものですから、それを解決するための一つ的手段としてこの中小企業支援センター、こういったものが包括的に解決する手段になるのではないかとということでこの会議に提案したものでございます。ただ、御提案をする中で、前回はそうですけれども、なかなかこのセンターだけで全てを解決するのは難しいだろう、そういった御意見を頂戴いたしましたので、改めてそこをですね、もう少し組み替えを検討するような形にしたいということを考えておるものですから、この資料2の一番下のところの真ん中ですね、今委員の皆さんからの御意見もございましたけれども、この「取り組むべき視点」を今一度どういう取組をすればいいのかというところを、この会議の中で御意見いただければなと考えているところでございます。ですので、今の委員の御発言に対してというところでございますと、その「取り組むべき視点」、これを考えるのがこの会議の目的である、というところは一つ間違いないのかなと思います。

会 長 ありがとうございます。だいぶ時間が押してまいりましたけれども、かなり色々な意見を頂戴しました。更にこういうことを本当は言いたかったという方がいましたらどうかお願いします。

委 員 今までの資料を私持ってきました、元々の小樽市の中小企業振興基本条例の概要というのを今改めて見てたんです。施策の基本方針等とありまして、この条例は何を求めているのかというと、中小企業者等と関係機関との連携、中小企業者と相互の連携を促進しましょうと。人材の育成や資金供給の円滑化を図り、経営基盤の強化を促進しましょうと、8項目あるんですね。多分これをやるためにどうしたらいいのでしょうかというのがこの会議なのかなとも思いますので、この中小企業支援センターというのは、私もちろん個人的には賛成なので、やるのであればここをワンストップ窓口として、ここで全てを受けます。ここを拠点にして、例えば色々な中小企業の皆さんの意見を聞いてですね、色々な提案をしたりですとか、ここが中心になって色々な勉強会をするだとか、ということの窓口を作ると。で、ここでできないものを、例えば事前にこういう相談をしたいなというものがあれば、連携する金融機関や商工会議所と一緒に話を聞くだとか。そういうふうな仕組みづくりならまだちょっといいのかなと思いました。以上です。

会 長 ありがとうございます。他に御意見ありますか。

委 員 もっともなんですよ。基本的な部分の考え方をどのように条例に基づいて実現していくかというプロセス、それを踏まえば、委員のおっしゃるとおりだと思うんですよ。現場で今、日々現実に、売上げとか、それからモノの製造を含めて現実の活動をしてい

る立場からいうと、待ったなしなんですよね。余裕が全くないんです。じっくりとやっていくという部分が一方で大きくあり、一つは現実的な本当に大きな問題に対して対処していくという、結果を出していくための、いわゆる中小企業に対する、また、そういう部分に対するフォロー、支援、そして今やるべき方向性、こういった部分がある程度、話し合っ出せるような、そういう機能にできれば。個々もいいんですけれども、それはやっぱり、行政やこういう会議全体の中で何か出せるようなことが必要ではないかなというふうにはちょっと思ってるんですよね。今の待ったなしの状況がかなりですね、人の問題もそうですし、集まらないというのもそうですし、それから我々にしてみれば、実際に販路を作りながら活動している中で、取引先又は相手がですね、どんどん無くなっているんですよ。主力がいつも言いますけれども百貨店で、百貨店自体がもう異業態競争間の中で存立しないような状況が出てきて、もうありとあらゆるところがですね、構造改革をしたり、色々な全てのところが異業態の新しい分野に投資をしてきている。全く今は何でもありの状況が市場の中ではあるんだということを踏まえたなら、やっぱりそういう部分に対応していける部分の提言が、またはそういうサポートができるようなこともやっぱり近々にやっていく必要があるんじゃないかなということ、現場では感じてるんで、それも踏まえた議論にしていくべきかなと思っています。

会 長 ありがとうございます。他にありますか。

委 員 ちょっと頭を冷やして皆さんの意見を聞いて、私の中で例えば観光関係で800万ですね、人が入ってきている中で、元々小樽から発祥している企業に関しては非常に資本力が弱いので、例えば運河沿い、もしくはあの近辺ですね、あのゾーンで商売をしたい、店を新たに展開することは不可能です。まして、その中でやっている中で、我々が例えばその中で市がやってくれるのであれば、あるゾーンですよ。何軒くらいの例えばゾーンで、いわゆる小樽市内の業者を、そこでもって人を常に雇いながら売っていくようなシステム、例えば市場クラスでいいですよ。平米的には大体20平米〜どのくらいかな、全体で言えば10坪以内でできるような小さい店。どれくらいですかね、8坪くらいかな、それくらいの大きさで展開しながらやっていって、そこで商売をしたいという企業は小樽市内に逆にどのくらいあるのかなと。それをまず決めて、それを集める上で小樽発祥、あくまでも外からの人間を入れないで、ゾーン的に例えば、アーケードの部分を全部小樽市が仕切って、分けてそこを完全にやるような、既存の人たちはどけてもらう、そういうようなゾーンを作るようなものをやらしてもらえば。それをばらばらやっていったら効果がないわけですよ。それをやるような案が、小樽市ができればできるのかなということがありますが、実際に小さな企業がやれることじゃないですよ。地価も高いし。だから、私が固定資産が高いというだけでなく、小樽の地価が高いというのが、微妙な部分でですね、小さな中小企業が展開できるには不可能なんです。家賃が安い市場の場合はペイするんですけれども、高い家賃を払って、そういうものを黒字の状態で展開していく企業が本当にあるというのが課題なんです。だからお寿司屋さんですかね、利益が高ければそれは何とかありますけれど、実際はそういう人たちだけじゃないでしょ。ですから、水産加工の人たちが自分のテナント店を持ちたいなと思ったとしても、利益率が高くないですから、そこでもって自分の持ってる商品を出したいというのができないわけですよ。それ以外の商品もあるじゃないですか。衣料品関係です

とか、色々なものがあると思うんですけども、そこで展開すれば生きていける人たちがどれくらいいるのかなってことすら、多分今のデータじゃわからないし、そうするとどの規模でもって、どういう施設を小樽市が提案していくかということを今の状態ではできないから、そこにお金を投資できないですよ。規模が分からないから。そして、中央でないとダメなんです。私が築港にいたとき、非常に絶望するのは中央から離れているので、いわゆる小樽市民が買い物に行きますが、観光客については、ホテルに泊まる方は使うけれども、あそこは観光じゃないですよ。観光地でもって、そこで800万が集まるというのはやっぱり基本的には、駅前から下ですよ。そこに小樽の企業が入って行くようなゾーンがないですよ。観光物産プラザはありますよね。ただし物産プラザで売っているのは、ショーケースの中で何センチ、何十センチのところで展開するだけです。意味ないです。それじゃただ単に飾ってるだけです。実際は人と人とが相對してこういういいものがあります、食べてくださいというような形をもってデパート的な、商売を定期的に、固定的にできるような施設を我々は欲しいんですけど、そこであそこで展開する場所ができないわけ、安くはできないよね。例えばお菓子屋さんが展開しているところがありますよね。すごく家賃が高いじゃないですか。そうすると利益が出ないから無理ですよって感じになりますよね。それを安く提供できるよという形にならないと商売にならないですよ。そこらへんをどう、例えば小樽市はできるのかなとか、それに対して皆さんはどういうふうな教育ができるのか、我々はどういうふうに指示していけばいいのかというような形が、それぞれがみんな抱えているような気がしてならないんですよ。みんなやりたいんですよ、ああいうところで商売。とりあえずとりとめのないことを言っちゃいましたけど、すいません、実態です。

会 長 ありがとうございます。他の意見はございませんか。

まただんだん盛り上がってきたんですけども。予定していた時間にかなり迫ってしまっていて。今の委員の意見もかなり実現できれば嬉しいなと思われる方もたくさんおられるかと思います。なかなか小樽市としてこういったスペースを仮に設けたとして、誰が実際できるよだとか、誰は実際入れちゃいけないのかといった話になってくると、埒が明かなくなってくると思いますけれど、やっぱり産学官金で連携する場合は、市はやっぱりサポートをして、盛り上がった所に如何に色々な規制を取っ払ってでもできるようにするかっていうのが、本来の行政の仕組みじゃないのかなと思っていて。そうするとやっぱり主役は民だと思うんですね。なので、こういったもの、センターを企画したとしても、やっぱりちゃんと上手くいくためには民が中心になって、ちゃんと引っ張っていき、あるいは自ら汗をかいてこういう仕事を誰かやる、ということを出さないと、なかなか、これを全部行政に任せるということもできないのかなとも思います。なので、せっかく大学もあるし、校長先生もおられますので。学校をある意味上手に活用するというのも、行政の壁とか、民の色々な人材が不足しているという中で、お互いに強い資源をプールしておいて、上手く連携できる仕組みをもう一回上手く考えた方が、こういった議論のスタートになるのかなと、改めて思いました。ということで、時間かなりこう超過しつつあるんですけども、最後に事務局何か意見ありますか。

事務局 すみません何点かだけ。簡潔にお話します。本日委員の皆さんから御意見をいただいて、最初調査の話出ましたけれども、調査については必要ないと思っているわけでは決して

ありません。今回の会議の２年間というスケジュールを踏まえた中で、委員の皆さんから御意見をいただいて、「取り組むべき視点」ということでまとめさせていただいておりますので、まずはこれを視点としながら会議の中で考えていきたいというのが一つの考え方でございます。ですので、調査は必要ないと考えているわけでは決してないということだけ御理解いただきたいと思います。それから、他都市の事例をマネするだけでいいのかというお話がありましたけれど、決してそれもそのように思ってなくてですね、あくまでもこの会議の中でどういうことをやればいいのかという御意見を頂戴したいと思っておりますので、そのきっかけとして御紹介しているというものでございます。それから人口減少の話がたくさん出ましたけれども、縦割りの話で申し訳ないですけれども、人口減少はまず市としては最重要課題だと考えております。今回第７次の総合計画を策定いたしましたけれども、その中でも人口減少は最重要課題だということで位置付けをして、人口対策会議という会議を設けて、その中で包括的な議論をしているという状況でございますので、御意見のありました家賃等の話、これは改めて会議の担当の方にお話をしたいなと考えてございます。それからですね、今回議論の方向性というか内容の部分で、少し混乱をさせてしまったというところがあるのかなということで反省しておりますので、改めて今日の御意見を踏まえながらですね、このセンターというのはあくまでも、さっきもお話しましたがけれども、人口減少という最重要課題の中で、その中で中小企業振興でどういうことができるのかということをこの会議で検討するというのが考えだと思っておりますので、その手段の一つとして今回センターを提示させていただいているというようなことでございますので、改めて今日の御意見を踏まえながらですね、次回の会議でその辺の議論のポイント等をお示しできればなというように考えてございます。以上でございます。

会 長 ありがとうございます。それでは事務局の方から事務連絡をお願いします。

次第４：閉会

事務局 <事務連絡>

会 長 それでは以上をもちまして、第５回小樽市中小企業振興会議を終了いたします。長時間、大変ありがとうございました。